

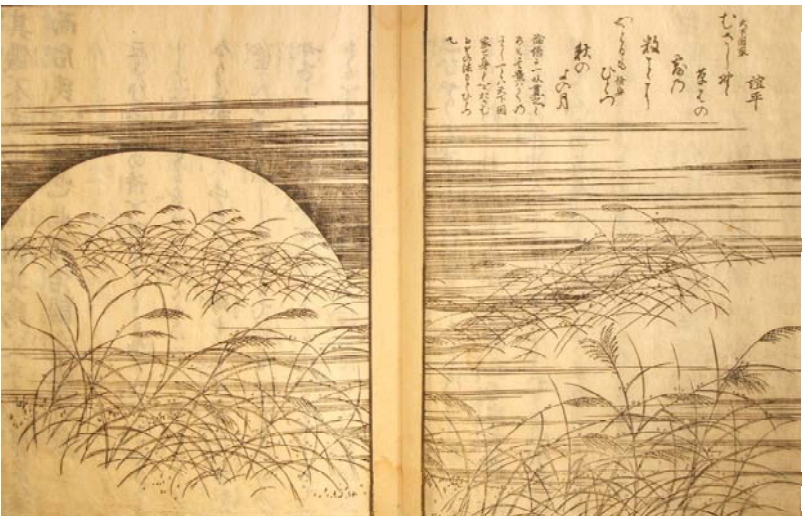
自然景物をどう活写するか

萩原 義雄

ことばで見よう

見ることに、すなわち、頭脳のなかに対象物を「イメージ」することから始まる。これを書き出すときに、文章にするか、また画像にするかの二者択一の方法が私たちには存在する。あるときには、これを両用して活写することもある。古典で云えば、「絵巻物」の世界が詞書きと装飾画とからなっていて、やがて、現代のマンガの世界へと移行していくのであろう。

ここで、文章と画像とでどう描き方が異なるかをまず知ることである。画家は、対象物を描くとき、色や形を見ている。では、作家はどうであらうか？。たとえば、「月を見る」。それは「月」ということばで対象見るのである。月が青白く夜空に光っている。時には西の低い空に真つ赤な月があかあかとたゆたっている。これらは、「光る」「たゆたう」ということばの概念で見ているのである。であれば、画家は、「光る月」も「地にたゆたう月」とことばで表現しなくてもその景物を活写することができる。だが、画家は月を色から切り離して描くことはできない。形を変容させて描くことも許されない。具象化して形を描かない月はあり得ないからだ。それ故、画家には古えの阿倍仲麻呂が古郷である奈良の春日山を遙かに偲んで見たであろう昇りくる月、隠遁者吉田兼好が眺めたであろう冴えた月を描けないのである。この遠い時代の色や形を描けないからだ。いわば画家は常に今この目で実際見ている月を描くのだ。一方、作家は時間や場所にとらわれずして、ことばで名付けていかねば「光る月」



も「たゆたう月」「冴えきつた月」も見えてこない。「光る」「たゆたう」「冴える」と表現することで、「月」という景物が見えてくる。それは凡ての色・形・感覚・陰影など、ことばで言い表すが故である。「月影」「白く丸い餅のような月」「お盆のような月」という、これらが書き手から読み手へ伝えていく。その伝達過程がことばにはあるからだ。月の世界を連想する、想像する語らいが生まれてくるからに他ならない。景物を描くことは作家の個性にも繋がっていく。文章を書くことで、連想・想像する源がどこにあるのかによってその活写されるであろう作家の感性は大いに特異性を発揮することができるからだ。

夜空にぼつかり浮かぶ月という対象景物を「月」と言い放つても、そこには何ものが描くであろううつまらぬありきたりの「月」があるに過ぎない。だが、作家や詩人たちは、この「月」を研ぎ澄まされた感性に委ね、ありきたりのことばの呪縛から解き放つていく努力を絶え間なく続けてきているのである。これすなわち「ことばの活写作業」という行為そのものなのである。一語一語のことばに己の心に乗せて紡ぎ出す。「ことばで書く」という行為を私たちは忘れては成るまい。

「月に学ぶ」―名月と十三夜―

東洋では、観月の宴が古来執り行われてきた。中国の中秋節は、やがて本邦に移入され、八月十五夜の名月として観賞する。『月令広義』に、

十五日中秋節 秋九十日、是日為中秋、是夕月中天是正、乃太陰朝元、宜守夜燒香。
三五夕三五十五夜。

と記述され、本邦の文献資料の初出は、島田忠臣『田氏家集』上下に記載の漢詩とされている。

八月十五日夜宴月

夜明如晝宴嘉賓。老兔寒蟾助主人。欲及露晞天向曙。未曾役轄滯 銀輪。

八月十五日夜惜月

月好偏憐是夜深。三更到曉可分陰。爭教天柱當西崎。礙滯明光不 肯沈。

八月十五日夜宴

隣月情多暗數蓂。遂光移座最西亭。若令他夕如今夜。不惜明朝一 莢零。

だが、観月の宴は、宮中年中行事として正式に定まるには、平安時代も村上天皇の御代である康保三年（九六六）になつてからである。歴史物語『榮花物語』月の宴巻に、

康保三年八月十五夜、月の宴せさせ給はんとて、清涼殿の御前に、皆方分ちて前栽植へさせ給ふ。左の頭には、繪所別當藏人少將濟時とあるは、小一條の師尹の大臣の御子、今の宜耀殿の女御の御兄なり。右の頭には、

造物所の別當右近少將爲光、これは九條殿の九郎君なり。劣らしまけじと挑みかはして、繪所の方には洲濱を繪に書きて、くさ／＼の花ひたるに勝りて書きたり。遣水・巖みな書きて、銀をませのかたにして、よろづの蟲どもを住ませ、大井に逍遙したるかたを書きて、鵜船に篝火ともしたるかたを書きて、蟲のかたはらに歌は書きたり。造物所の方には、おもしろき洲濱を彫りて、潮みちたるかたをつくりて、色／＼の造花を植へ、松竹などを彫り付けて、いとおもしろし。かゝれども、歌は女郎花にぞつけたる。左方、

君がため花植へそむと告げねども千代まつ音にぞなきぬる

右方、

心して今年は匂へ女郎花咲かぬ花ぞと人は見るとも

御遊ありて、上達部多く参り給ひて、御祿さま／＼なり。

と村上天皇が詩歌を好まれ月の宴が催されたことを描かいている。物語としては、光源氏の君が須磨に赴く身となつて、遠く都の観月の宴を恋慕う様を紫式部は『源氏物語』須磨の巻に、

月のいとほなやかにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」 と思し出でて、殿上の御遊び恋しく、「所々眺めたまふらむかし」 と思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。と描き出してきている。その後見人であった藤原道長は、

この世をばわが世とぞ思ふ望月の虧けたることなしと思へば
と『小右記』に歌う。

だが、現在の私たちが十五夜に「月見団子」を供える風習についてはまだこの時代には芽生えていない。いわば、詩歌管弦の月見の宴でしかないようだ。時代は降って室町時代になつて、はじめて式例を記録した『年中恒例記』に月に供華することが記述されている。さらに、十三夜の月宴も見え、こちらは日本独特の行事のようだ。



月という景物

これまで、月という景物を活写する過程について述べてきた。何故このようなところから求めてきたかといえば、それがことばのメタファーを有する「月」という景物が私たち人類と様々なところ、時空のなかで拘わっているからに他ならないからである。

月に創造物を求めた人の営みには、「月兔」の譚は重要な素材でもあった。

『今昔物語集』巻第五・三獸行菩薩道、兔燒身語第十三に、



今昔、天竺二兔・狐・猿、三ノ獸有テ共ニ誠ノ心ヲ發ヲコシテ菩薩ノ道ヲ行ヒケリ。各思ハク、「我等前世ニ罪障深重ニシテ賤キ獸ト生タリ。此レ、前世ニ、生有ル者ヲ不哀ズ、財物ヲ惜テ人ニ不與ズ。如此クノ罪ミ深クシテ地獄ニ墮テ苦ヲ久ク受テ残ノ報ニカク生タル也。然レバ此ノ度ビ、此ノ身ヲ捨テム」。年シ、我ヨリ老タルヲバ祖ノ如クニ敬ヒ、年、我ヨリ少シ進タルヲバ兄ノ如クニシ、

年、我レヨリ少シ劣タルヲバ弟ノ如ク哀ビ、自ラノ事ヲバ捨テ、他ノ事ヲ前トス。天帝尺、此レヲ見ミ給テ、「此等、獸ノ身也ト云ヘドモ、難有キ心也。人ノ身ヲ受タリト云ヘドモ、或ハ生タル者ヲ殺シ、或ハ人ノ財ヲ奪ヒ、或ハ父母ヲ殺シ、或ハ兄弟ヲ讎敵ノ如ク思ヒ、或ハ咲ノ内ニモ悪シキ思ヒ有リ、或ハ戀タル形ニモ嘖レル心深シ。何況ヤ、如此ノ獸ハ、實ノ心深ク難思シ。然レバ試ムト思シテ忽ニ老タル翁ノ无力ニシテ羸レ无術氣ナル形ニ變ジテ、此ノ三ノ獸ノ有ル所ニ至給テ宣ハク、「我レ、年老ヒ羸レテ為ム方无シ。汝達、三ノ獸、我レヲ養ナヒ給ヘ。我レ子无ク家貧クシテ食物无シ。聞ケバ、汝達、三ノ獸、哀ミノ心深ク有リ」ト。三ノ獸、此ノ事ヲ聞テ云ク、「此レ、我等ガ本等ガ本ノ心也。速ニ可養シ」ト云テ、猿ハ木ニ登テ、栗・柿・梨子・棗・柑子・橘・菴・椿・栗・郁子・山女等ヲ取テ持来リ、里ニ出テハ瓜・茄子・大豆・小豆・大角豆・粟・稗・黍ビ等ヲ取テ持来テ好ニ随テ令食シム。狐ハ墓屋ノ邊

ニ行テ人ノ祭り置タル菜・炊交・鮑・鯉、種々ノ魚類等ノ取テ持来テ思ヒニ随テ令食ムルニ、翁既ニ飽滿シヌ。如此クシテ日來ヲ經ルニ、翁ノ云ク、「此ノ一ノ獸ハ實ニ深キ心有リケリ。此レ、既ニ菩薩也ケリ」ト云フニ、兔ハ勵ノ心ヲ發シテ燈ヲ取テ、耳ハ高ク偃セニシテ、目ハ大キニ、前ノ足短カク、尻ノ穴ハ大キニ開テ、東西南北求メ行ルケドモ、更ニ求メ得タル物无シ。然レバ猿・狐ト翁ト、且ハ耻シメ、且ハ蔑ヅリ咲ヒテ勵セドモ力不及ズシテ、兔ノ思ハク、「我レ翁ヲ養ハムガ為ニ野山ニ行クト云ヘドモ、野山怖シク破无シ。人ニ被殺レ、獸ニ可被噉シ、徒ニ、心ニ非ズ、身ヲ失フ事无量シ。只不如ジ、我レ今、此ノ身ヲ捨テ、此ノ翁ニ被食テ永ク此ノ生ヲ離ム」思テ、翁ノ許ニ行テ云ク、「今、我レ、出デ、甘美ノ物ヲ求テ来ラムトス。木ヲ拾ヒテ火ヲ燒テ待チ給ヘ」ト。然ラバ猿ハ木ヲ拾ヒテ来ヌ。狐ハ火ヲ取テ来テ燒付ケテ、若シヤト待ツ程ニ、兔、持ツ物无クシテ来レリ。其ノ時ニ猿・狐ネ、此レヲ見テ云ク、「汝ゾ何物ヲカ持テ来ラム。此レ、思ツル事也。虚言ヲ以テ人ヲ謀テ木ヲ拾ハセ火ヲ燒セテ、汝子火ヲ温マムトテ、齧ク」ト云ヘバ、兔、「我レ、食物ヲ求テ持来ルニ无力シ。然レバ只我ガ身ヲ燒テ可食給シ」ト云テ、火ノ中ニ踊入テ燒死ヌ。其ノ時ニ天帝釋、本形ニ復シテ、此ノ兔ノ火ニ入タル形ヲ月ノ中ニ移シテ、普ク一切ノ衆生ニ令見ガ為メニ月ノ中ニ籠メ給ヒツ。然レバ月ノ面ニ雲ノ様ル物ノ有ハ、此ノ兔ノ火ニ燒タル煙也。亦、月ノ中ニ兔ノ有ルト云ハ此ノ兔ノ形也。万ノ人、月ヲ見ム毎ニ此ノ兔ノ事可思出シ。〔大系一 365⑩〜367⑦〕

この出典は、『大唐西域記』巻第七の「婆羅痾(女黠反)斯國」に、

烈士池西。有二獸m25561堵波。是如來修菩薩行時。燒身之處。劫初時。於此林野有狐兔m20525。異類相悅。時天帝釋。欲驗修菩薩行者。降靈應化。爲一老夫。謂二獸曰。一二子善安隱乎。無驚懼耶。曰涉豐草。遊茂林。異類同歡。既安且樂。老夫曰聞一二子情厚意密。忘其老弊。故此遠尋。今正飢乏。何以饋食。曰幸少留此。我躬馳訪。於是同心虛已。分路營求。狐沿水濱。銜一鮮鯉。m20525於林樹。採異花菓。俱來至止。同進老夫。唯兔空還。遊躍左右。老夫謂曰。以吾觀之。爾曹未和。m20525狐同志。各能役心。唯兔空返。獨無相饋。以此言之。誠可知也。兔聞譏議。謂狐や曰。多聚樵蘇。方有所作。狐m20525競馳。銜草曳木。既已藎崇。猛焰將熾。兔曰仁者我身卑劣。所求難遂。敢以微躬。充此一m44022。辭畢入火。尋即致死。是時老夫。復帝

釋身。除燼收骸。傷歎良久。謂狐や曰。一何至此。吾感其心。不泯其迹。寄之月輪。傳乎後世。故彼咸言。月中之兔。自斯而有。

という。この類話として、大系本『今昔物語集』の頭注に、『旧雜譬喻經』卷下(45)があつて、ここでは、「狐・猿・獺・兔」の四獣が登場しているという。他類話譚に、『經律異相』卷第四十七「兔王依附道人投身火聚生兜卒天」
『大正新修大藏經』第五十三卷事彙部上、253頁がある。

室町時代の『運歩色葉集』の語注記には、

昔、釋尊菩薩、行の砌り、鳥類草木まで御心これあり。中にも猿は菓子を奉る。獺は河魚を獻ずる。兔はその調なし。其の時、草木を集め身を焼き佛食に成さんと欲す。帝釈これを感じて、天に上らせ月に戴かせられぬ。今にかくのごとく月の中の兔、是なり。

も『庭訓往來註』十一月十二日の条の、

又昔シ釈迦菩薩ノ行ノ砌、鳥類草木ニ至マテ仰心アリ。中ニモ猿ハ奉ルニ菓子ヲ。狐ハ獻ニ川魚ヲ。兔ハ无調法ニ不能^{シテ}獻ルコトニ一物ヲ。其時集ニ草木ヲ一燒^シ身ヲ欲^シ成ニ佛ノ食ニ。帝尺ハ感^{シテ}之ヲ、天ニ上^テ被^リ載^リ月出也。故ニ云^レル也云々。

に依據するものであることが知られる。では、この『庭訓往來註』の注釈者はどのような資料を本に、このような記述をしたのか、その出所を求めていくことにも成る。

「補遺」の内容は、二〇〇〇年九月二十九日(金)のことばの溜池「烏兔」の項目に連関する。

月の風景と感慨

アニメーション画像では、ハウス名劇場で放映された『家なき子レミ』の、エンディング、フランスの田園地帯の風景が、川面に沈む夕日、川に昇る月の風景がもの見事に描き出されている。

文章に書き出された「月」はどうであろう、『レトリカ』^{白水社刊}には、数多くの用例を見るのだが、その例を見てみると、

○往來へ飛びだすと、ありがたい、雨が霽^はれている。薄墨の雲の中に、カマボコのような月さえ覗^{のぞ}いている。「獅子文六『達磨町七番地』」

○断えずゆらめく木ノ上を／海月のやうに青ざめた／月がよろよろ泳ぎゆく。「与謝野晶子『舞ころも』今夜の空は血を流し」

○月は宇宙のろうそく。心のたき火。詩人たちの夢枕。「長谷川時夫『宇宙の森へようこそ』」

○樺の梢に引つ掛かりそうな位置に満月が浮かんでいた。樺の葉は一枚一枚磨いたように光っていたが、樹全体は夜空に貼りついた影絵だった。血管が透けて見えそうな赤味を帯びた大きな月だ。「立松和平『彼岸の駅』」

○鎌のような月が、黒い空を切り裂きながら飛びつづけていた。風に流される雲が早かったから、月はまるで蒼白い飛行物体のようだ。「高樹のぶ子『残光』」

「金色の丸い月」の風景描写の効果及び作者の意図

○ぼんやりしたわたしの目に、見はるかす海辺の緑の砂地がうかんでくる。頭上の紺碧の空に、一輪の金色の丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡す限り緑のすいかが植わっている。

○まどろみかけたわたしの目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。(魯迅『古郷』竹内好訳)

※取り留めがきかなくなった状態の中国社会は、色で表現すると「紺碧」である。「金色の丸い月」は、希望。紺碧の空

の中にひとときわ輝く金色の月は新しい社会をイメージしている。

月夜

●与謝野晶子『月夜』の書き出し「お幸の家は石津村で一番の旧家でそして昔は大地主であつたために、明治の維新後に百姓が名字を捨てる時にも、沢山の田と云ふ意味で太田と附けたと云はれて居ました。」…「月夜ですもの提灯は持たないでもいいし。」…

○その海の断面のやうな月夜の下で、花園の花々は絶えず群生した蛾のやうにほの白い圓陣を造つてゐた。「横光利一『花園の思想』」

月夜鳥(つきよがらす)月の明るい晩に、浮かれて鳴きだすカラスのこと。飲兵衛の人の例えにも使われる。

月の語彙

☆月つき「天文05」「―が出る／昇る／隠れる」「―と鼈」
【月世界】かぐや姫は―の人でした。

三秋 上弦(じょうげん)、下弦(かげん)、げげん、弓張月(ゆみはりづき)、片割月(かたわれづき)、弦月(げんげつ)、半月(はんげつ)、月の弓(つきのゆみ)、月の舟(つきのふね)、上り月(のぼりづき)、下り月(くだりづき)、望(もちく)たり(もちく)たり、有明(ありあけ)、有明月(ありあけづき)、朝月(あさづき)、朝月夜(あさづくよ)、昼の月(ひるのつき)、夕月(ゆうづき)、夕月夜(ゆうづきよ)、宵月(よいづき)、宵月夜(よいづきよ)、四日月(よっかづき)、五日月(いつかづき)、八日月(ようかづき)、十日月(とおかづき)、二十日月(はつかづき)、月の出(つき)ので、月の入(つきのいり)、入るさの月(いるさのつき)、月上(つきのぼる)、月渡(つきわたる)、月傾(つきかたむく)、月落(つきおつ)、月更(つきふくる)、遅月(おそづき)、月の秋(つきのあき)、月夜(つき

よ)、月よみ(つきよみ)、月夜鳥(つきよがらす)、月の輪(つきのわ)、月の暈(つきのかさ)、幻月(げんげつ)、月白(つきしろ)、姮娥(こうが)、嫦娥(じょうが)、玉兔(ぎよくと)、月の兔(つきのうさぎ)、月の蟾(つきのかえる)、月の鼠(つきのねずみ)、月の桂(つきのかつら)、月の都(つきのみやこ)、月宮殿(げつきゆうでん)、月の鏡(つきのかがみ)、月の劍(つきのけん)、月の氷(つきのこおり)

☆月代(つきしろ)三秋 月白(つきしろ)

☆上り月のぼりづき 三秋 上弦の月(じょうげんのつき)

☆降り月(くだりづき) 三秋 下り月(くだりづき)、下弦の月(かげんのつき)、望(もちく)たり(もちく)たり)

☆盆の月(ぼんのつき) 初秋

☆初月(はつづき) 仲秋 初月夜(はつづきよ)

☆二日月(ふつかづき) 仲秋 纖月(せんげつ)、二日月(ふつかのつき)

☆三日月(みかづき) 仲秋 三日の月(みつかのつき)、月の眉(つきのまゆ)、眉書月(まゆがきづき)、眉月(まゆづき)、三日月眉(みかづきまゆ)、新月(しんげつ)、若月(じゃくげつ)、月の劍(つきのつるぎ)、鎌月(かまつき)、蛾眉(がび)、初魄(しよはく)

☆弓張月(ゆみはりづき) 三秋 弦(ゆみはり)、上の弓張(かみのゆみはり)、下の弓張(しもゆみはり)、弦月(げんげつ)、半月(はんげつ)、片割月(かたわれづき)、月の弓(つきのゆみ)、月の舟(つきのふね)

☆夕月夜(ゆうづきよ) 三秋 夕月(ゆうづき)、夕月夜(ゆうづくよ)、宵月(よいづき)、宵月夜(よいづきよ)

☆待宵(まつよい) 仲秋 小望月(こもちづき)

☆春月(しゅんげつ) 臘月(おぼろづき)

☆寒月(かんげつ)

☆名月(めいげつ) 仲秋 十五夜(じゅうごや)、仲秋節(ちゅうしゅうせつ)、芋名月(いもめいげつ)、今日の月(きょうのつき)、今宵の月(こんよいのつき)、月今宵(つきこんよい)、三五夜(さんごや)、三五の月(さんごのつき)、端正

の月(たんししょうのつき)、名高き月(なだかきつき)、望月(もちづき)、望の夜(もちのよ)、満月(まんげつ)、明月(めいげつ)

☆ 良夜(りょうや) 仲秋 良宵(りょうしやう)、佳宵(かしよう)

☆ 無月(むげつ) 仲秋 曇る名月(くもるめいげつ)、仲秋無月(ちゆうしゆうむげつ)、月の雲(つきのくも)

☆ 雨月(うげつ) 仲秋 雨名月(あめめいげつ)、雨夜の月(あまよのつき)、雨の月(あめのつき)、月の雨(つきのあめ)

☆ 十六夜(いざよい) 仲秋 いざよう月(いざようつき)、二八夜(にはちや)、十六夜(じゅうろくや)、既望(きぼう)

☆ 立待月(たちまちづき) 仲秋 十七夜(じゅうしちや)、立待(たちまち)

☆ 居待月(いまちづき) 仲秋 座待月(いまちづき)、居待(いまち)

十八夜月(じゅうはちやづき)

☆ 臥待月(ふしまちづき) 仲秋 寝待月(ねまちづき)、臥待(ふしまち)、寝待(ねまち)

☆ 更待月(ふけまちづき) 仲秋 更待(ふけまち)、亥中の月(いなかのつき)、二十日亥中(はつかいなか)、二十日月(はつかづき)

☆ 宵闇(よいやみ) 仲秋

☆ 有明月(ありあけづき) 仲秋 有明(ありあけ)、朝月(あさづき)、

朝月夜(あさつきよ)、明の月(あけのつき)、残る月(のこるつき) 残月(ざんげつ)

☆ 真夜中の月(まよなかのつき) 仲秋 二十三夜(にじゅうさんや)

☆ 後の月のちのつき 晩秋 二夜の月(ふたよのつき)、十三夜(じゅうさんや)、豆名月(まめめいげつ)、栗名月(くりめいげつ)、名残の月(なごりのつき)、女名月(おんなめいげつ)、姥月(うばづき)

《補注》

※1、小学館『日本国語大辞典』第二版の「つき【月】」の補注2で、「月は、「つき」のほか、古来さまざまに呼ばれた。つく、つくよ、つくよみ、つくよみおと、「つきひと、つきひとおと」、「ささらえおと」、「かつらおと」、「ののさま、つきしろ、月輪、月霊、月魄(げつぱく)、月陰、太陰、陰宗、陰魄、玉輪、玉魄、玉盤、月兔(げつと)、玉兔、陰兔、玉蟾(ぎよくせん)、蟾蜍(せんじよ)、蟾宮、蟾窟(せんくつ)、蟾兔、桂月(けいげつ)、桂輪、桂魄、桂窟、桂蟾、娥(こうが)、嫦娥(こうが・じようが)、宮(こうきゆう)、嫦娥(こうきゆう・じようきゆう)など。」と記述する。

※2、「名月」と「明月」との混同。十五夜乃至十三夜の月に「名月」の字が宛てられたのは室町時代の『山密往来』(一三七三年)南呂一五日「八月三五之良夜者。九商(秋也)無双之名月也」からという。同じく『日国』の【用例】に、「俳諧・旅寝論」(一六九九年)「されば三五十三夜の月、今をしながら名月といへり。其中何れの月か不知、名月といふ故有と聞。(略)又明の字を用る事は和漢ともに三五の清光を賞し来る故に、明と名と通ひたるをもつて通用は成べし」とあって、【語誌】には、「金葉・秋・一八九」の詞書に「翫明月」といへることをよめる」とあるように、古くは「明月」を用い、鎌倉時代まで「名月」を見出すことは難しい」と記載がある。※『淮南子』説山訓「明月之珠、出於蜺蜃」